シンポジウム 17　企画概要

タイトル	地域緩和ケア：世界・研究の視点を踏まえて OPTIM 後の日本を見る

テーマ

緩和ケア普及のための地域プロジェクト（OPTIM プロジェクト）を総括し、欧米との違いを知り、将来の地域緩和ケアの方向性を探る

概要

2008 年４月より 3 年間、緩和ケア普及のための地域プロジェクト（OPTIM プロジェクト）が実施された。鶴岡地域，柏地域，浜松地域，長崎地域の 4 地域を対象とした地域介入による前後比較研究である。対象疾患は悪性腫瘍で、主要評価項目は、quality of care，専門緩和ケアサービスの利用数，自宅死亡率である。地域に対する介入として，①緩和ケアの知識・技術の向上，②がん患者・家族に対する適切な情報の提供，③地域の緩和ケアの包括的なコーディネーションと連携の促進(地域の相談窓口の設置，退院支援・調整プログラムの導入，地域多職種連携カンファレンス）、④緩和ケア専門家による診療・ケアの提供を柱とする複合介入,が行われた。

制度や体制の組織的な変更を伴わない包括的な地域緩和ケアプログラムによって生じる最も大きい変化は地域ネットワークの構築であり、医療福祉従事者の知識を改善して困難感を軽減するのみならず、患者が希望する場所、多くは自宅での生活を可能にし、かつ、患者・遺族の緩和ケアの質評価や quality of life も間接的に改善しうることが示唆された。3 年間の OPTIM プロジェクトがどのような成果をもたらしたかを総括する。

そして、ＧＰ制度のある国における地域緩和ケア（イギリスの実例)、ＧＰ制度のない国における地域緩和ケア（米国の実例）と比較することで、日本の地域緩和ケアの現在の立ち位置を理解し、将来の在宅でのがん医療、緩和ケアがどのようになっていくか、どうあるべきか話し合える企画にしたい。

森田にはＯＰＴＩＭの結果を踏まえて、以下の１～５の論点についての示唆をまとめて示してもらう

それ以外の３名の各演者は特に以下の点について実践を整理してもらう